
推測屋～できそこないの日常推理～

花澤 文化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

推測屋〜できそこないの日常推理〜

【Nコード】

N2293L

【作者名】

花澤 文化

【あらすじ】

高校一年生である新野双芽は、クラスメイトの江戸城百香、秘書的役割である学舎真琴とともに事務所、またはお店を開いている。

その事務所の名前は……

おかしな面々でお送りする普通とはいえない物語。

推理に恋愛そしてバトルとギャグを少々。

それらがつまったグダグダ日常生活！

依頼は少ない頼りない事務所ですが・・・

プログラマーボクラノシヨウカイ (前書き)

初投稿です！ではどうぞ！

プロローグくボクラノシヨウカイ

雨が降っていた。雨水が、雨音が体をたたく。目の前には女性が立っていた。

ズガン！

女性は倒れた。あの音はなんだっただろう。分かることはあたりが赤く染まつてること・・・
僕がひどく泣いていることだけだった・・・

○

目が覚めるともう授業は終わっていた。それどころかみんなもう帰り始めている。

「嫌な夢だよ・・・ほんと・・・」

僕も帰ろうかと席を立った時

「双芽君！」
ふため

僕を呼ぶ声が聞こえたのでそちらに振り向くとすぐ目の前に整った顔があった。

「うおおう！近けえよ！」

整った顔、髪は少し茶色がかったきれいなロングストレート。背丈は150後半、胸は成長が遅れてるらしい、そして16歳の江戸城^{えとじろ}ももか百香だ。

美人というより可愛いタイプで守ってあげたくなるそうだ（クラス男子参照）

「う、ごめんなさい。でも双芽君勝手に帰っちゃいそうだったから・・・」

こいつは幼馴染でもなんでもないただのクラスメイトだ。なのになぜ一緒に帰るのか？

付き合っているから？仲がかなりいいから？実は同棲してるから？どれも違う。

ただ目的地が同じなだけだ

な、別に普通な理由。特別な関係なんかじゃない。だから言っただけのクラスメイトだって。

「一体いつから寝てたの？」

「ああ、さつきか。さつきは6校時目ぐらいからだと思う」「高校をなんだと思ってるの・・・」

確かにその通りなのだが・・・僕らの学校、多色島^{たしよくじま}高校は週に1度特別授業が6校時、7校時と続く。内容は受験や道徳的なこと。今日がその日なので受けなくて困ることはない。

僕らはまだ1年生なので受験も関係ない、なので特別授業といっても全然楽しくない。

寝てしまうのもしょうがないと僕は思うよ。

学校から出て、大きい道路に沿って歩くこと15分。目の前になんの変哲もないビルがある。

ここの一階が僕らの目的地だ。

ビルの自動ドアを通るとすぐ横に黒いドアがある。

ギイイイイ

音がするな。たてつけが悪くなったかとか思いながら部屋に入ると、コーヒーのにおいがした。

部屋はそれほど広くないが、人が5人は住めるという場所だった。

まあ、机や資料などで散らかってはいるが・・・。

ガタンッ

「「ひっ！」」

すると急に机が動き出した。机の下から出てきたのは美しい女性。

「お帰りなさい、もうそろそろ来るころだと思っていました。」

急に机の下から出てきたことには驚いたが、こいつは学舎真琴^{まなひやまこと}。

スーツで身を包み、黒髪をポニーテールにしている。メガネをかけており、見た目はできる社長秘書って感じた。ナイスバディ、美人という言葉がとても似合う。

「なんだ驚かさないでよ、学舎さん。ただいま。」

「よう、ただいま。」

「江戸城さんも社長も元気そうだなによりです。」

今こいつの言った社長とは僕のことだ。一応ここは事務所的な場所
でな、この事務所を立ち上げたのが僕なので社長と呼ばれている。
会社というほど大きくはないのでその名前はやめると言ってるんだ
が。

「さあて。」

百香はここにくると仕事モードになり、大きいリボンを髪につける。
意味はないらしいが気分的な問題だそうだ。

「僕も、仕事するか……」

百香が掃除、真琴がコーヒーを入れてくれてる間に僕はパソコンを
立ち上げた。

「依頼はきてないかなつと。」

僕は自ら作った掲示板をチェックしていた。依頼はここに書きこま
れるからな。

しばらく画面とにらめっこして……そして……

「やっぱないか……」

依頼はきてなかった。まだ作って間もない掲示板なのでしょうがな
いかもしれないが、少なすぎる。

ちゃんとここ事務所の住所ものせているので場所もわかるはずだ。

「コーヒーが入りました。社長今日は？」

「今日もない。なのでいつも通りゆっくりしてる。」

僕が真琴の入れてくれたコーヒーを飲み、眠ろうと目をつぶると・

「えー！今日も依頼ないのー」

百香の文句が聞こえてきた。

「しょうがないだろ。そのうちくるって。」

「双芽くんのかっこいいあんなところやこんなところが見たかったな・・・」

誰だそいつは。僕はあるところやこんなところを見せたことがない。きつとそいつは双芽を名乗る正義の味方だったのだろう。

「ぶー」

なぜか拗ねてしまった。依頼がこないのは僕のせいじゃないだろう。そして拗ねかたが子供すぎる。

僕はもう一度寝るために目をつぶった・・・

・・・おおう！忘れてた！！この事務所のこと説明してなかった！

ここは困ったことがあればなんでも解決！どんな依頼でも大歓迎の

すいそくや
推測屋だ！！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？このフリーズだめ？まいったな・・・僕も微妙だと思っんだ。

でも掲示板にものせてるし、もう変えるのもめんどくさいしね。寝る気も失せた。とりあえず、ゲームでもやって、時間をつぶすことにしよう。

レベル上げしなきゃボスに勝てないんだよな・・・このゲーム・・・。

そこから僕、しんのふため新野双芽のできそこないの日常が始まった。

「っていうか、もっと前から始まってるよ！依頼がないだけでな！」

「双芽君！？最後までいいカツコつけようよ！自虐ネタはだめだつて

！」

「社長・・・・・・・・幻滅です」

「僕！？僕が悪いの！？」

まあ、グダグダなんだけどね。

ブローグ〜ボクラノシヨウカイ〜（後書き）

初めての投稿で連載小説を書きました。

自分で自分の首を絞める行為ですねwww

まだまだ未熟でおかしなところがあったり、おもしろくないかもしれません。

そしてグダグダ。

そんな指摘を含めて感想いただけたら嬉しいです。

最後まで読んでくれてありがとうございます！！

第1章 第1話問題編〜サガシモノハナンデスカ〜

「おいおい、もうこれで2週間だぜ・・・」

いきなりで悪いが僕、新野双芽しんのふためは今、とてつもなくショックを受けている・・・なぜか？

「依頼がこんなにこないとはな・・・」

そう依頼がこない・・・推測屋すいそくやという探偵のできそこないみたいなことしてるのでこれは致命的。死活問題でもある。

「社長、今日は日曜日です。ゆっくり休まれてはどうでしょうか？」

僕のことを社長と呼ぶこのナイスバディは学舎真琴まなびやまこと。秘書的な役割を担ってくれている美人な女性だ。

「そのセリフはいつも忙しい社長に言ってくれ」

「ですからもつと休んでくださいということですよ。」

「これ以上どうやって休めばいいかわかんねえよ！先週の12時間睡眠はだめだからな！」

ああもう！一回依頼してみろってんだ！そしたら光の速さで事件を・・・光は無理だな。音？無理だ。

じゃあ、飛行機？無理だな。自動車、無理だ。徒歩ぐらの速さで解決してやるのに・・・。

ギイイイイイイ

「こんにちわー！双芽君！依頼どうだった？」

ダラダラダラダラダラ・・・冷や汗が止まらない・・・やべえ、バシたらまためんどくさいことになる。この前は口きいてもらうまで、約6時間は話し続けた・・・もうあんな思いはやだ・・・。

「依頼なんかどうだっていい！それぐらいに忙しいんだ！！」

「えー、そんなんだ・・・」

ふう、勢いは大切だよね。なんとか通った・・・

「ごめんね。このお兄ちゃん忙しいみたいで・・・だから代わりに私が探してあげる」

はい？こいつだれと話してんだ。と思っていると・・・机が邪魔で見えなかったが、そこには小学校低学年ぐらいの女の子と男の子がいた。

「百香。そいつら二人どうかしたのか？」

「うん、なんか探し物があって、だから双芽君に頼もうと思って・・・でも忙しいなら私が・・・」

僕は百香の言葉を最後まで聞かず、その子供の方へ歩いていき・・・

「お坊ちゃんにお嬢さんなにかお困りですか？」

漫画で読んだ神士そっくりの口調で尋ねた。

○

この推測屋の事務所は机が軽く10つはある。そして椅子も一応それなりにある。でも依頼者にはソファに座ってもらおうというきまりを今使えるとは・・・感動・・・。

ソファの位置はちょうど部屋の中央である。

「えーと、依頼内容は、風に飛ばされたハンカチを探してほしいと」「うん」

子供二人はうなずいた。

二人の名前は朝倉暖あさくらのんと朝倉翔太あさくらしょうたというらしい。

二人は兄妹で翔太君がお兄さん、暖ちゃんが妹ということらしい。暖ちゃんは短いツインテールで赤いワンピースをきている。翔太君は髪の毛を短く切っていて、白い半袖青い半ズボンだ。

「のんのハンカチはお母さんからもらった大切なハンカチなんだ」

暖ちゃんは泣いて泣いてしょうがないため、翔太君が話してくれた。もしかしたら僕よりしっかりしてるかもしれない。

「翔太君、双芽君よりしっかりしてるね」

実際言われると腹が立つな、これ。

「グスン・・・ひつく・・・見つかる？」

僕はハートを打ち抜かれた！双芽は戦闘不能になった！

「ちよつと双芽君？大丈夫？」

返事がないただのしかば……グフツ！

「目が覚めましたか、それはなによりです。」

「いてえよ！」

真琴にグーで腹を殴られた。涙目で上目づかい……だれでもキ
ユンとくるだろ。……
え？僕だけの特殊な性癖じゃないよね！？

「うん、大丈夫。見つけてみせるよ」

「ホント！やったーお兄ちゃんありがとう！」

とても喜んでくれた……なぜかこっちまで嬉しくなってくるは
しゃぎようだな。

「ムスツ」

なぜか翔太君の様子がおかしかった。拗ねてるのかな？だとしたら
なんで？子供の考えることはわからない。

「このお兄ちゃんはね、とつてもすごいんだよ。もうどんな事件で
も光の速さで解決しちゃうんだからっ！」

悪い……百香……徒歩ぐらいの速さじゃないと無理だつて
さつき結論がでたんだ……。

そんな軽い罪悪感を胸から消し去り、依頼について詳しく聞くこと
にした。

「ハンカチの形と色は？」

「普通に四角っぽくて、赤色の花柄」

今度は暖ちゃんが話してくれた。大分落ち着いたらしい。そりゃあ、大事なものなくすとつらいよな。

僕も大事なものを……いや、今は関係ないな。

「ジュースです。」

「わあ、ありがとうお姉ちゃん！」

「ありがとう！」

真琴が照れている。もしかしたらこういう状況に弱いのかも……
……試してやるぞ。

「社長、コーヒーです。」

「わあ、ありがとうお姉ちゃん！」

「頭がおかしくなるには少し早いと思いますよ。」

「つめてえ！」

氷点下の言葉だった。いくらなんでもひどすぎだろう！あんな怖い
言い方しなくても！試さなければよかった……。

「よし、じゃあ、探しに行こうか」

「うん」

「私にとっいたら初めての依頼だ……頑張らないとっ！」

百香がなぜかすごく嬉しそうだ。そういやこいつがこの事務所に所
属してからは依頼一件もなかったからな。僕でさえ久しぶりでワクワク
している。どんなに小さくとも依頼は依頼、頑張らないとな。

第1章 第1話問題編〜サガシモノハナンデスカ〜（後書き）

えっとどうでしょうか？

とりあえず物語が進んでいる状態です。

まだ全然だめな所だらけですが、頑張りたいと思います。

感想、指摘などお待ちしております！

最後まで読んでいただきありがとうございました。

第2話解決編〜アイトシテノプライド〜（前書き）

この話は解決編です。まずはこの前の話の問題編を見てから読んでください。

僕の抵抗は空しく、簡単に連れて行かれた。残された部屋のテレビには飛び降り自殺についてのニュースが悲しく流れている。……マジで助けてほしいんだけど。

○

僕らの事務所から歩いて20分のところに大きな町、というより店の集合体みたいな場所がある。デパートから電気屋、本屋にスーパー、コンビニなどありとあらゆる店がところせましと並んでいる。道も1つ、1つが大きくまさにお客さんのことを考えてるといえるつくりだ。

「「こらへんでなくしたの？」
「うん」

僕らはそのなかでもひとときわ大きい道の歩道に立っていた。日曜だけあって人も多いし、道の両脇にはお店しかない。なのに不思議と狭いとは感じなかった。

「それでどっちの方に飛ばされたのかな？」
「「こつち」

僕が心底丁寧に聞いていると、暖ちゃんと翔太君の指差す方向が真逆だった。

「あれ？えつとどつちかな？」
「「こつち」

どうしよう……何回聞いても真逆だ……困ったな……。

「えっとどっちが正しいの？」

「「こっち」

百香が優しく聞いても同じだった……はあ、あんまり使いたくないけど使うしかないか……。

「しょうがない」

といつつ、僕は肩からかけていたカバンからケースを取り出す。

「双芽君？それ何？」

「ただのメガネだよ、ただの」

と百香の質問に答えつつ、中から黒ぶちメガネを出し、ゆっくりとかけた。

「社長のこのモードを見るのは久々です。」

「え？なにになに？なにが始まるの？」

百香が興味津津できいてくる。お前は子供か。まだ翔太君と暖ちゃんの方が落ち着いてるぞ。

「ふう……」

1分後、僕はメガネをはずし、ケースにしまい、カバンに入れた。

「え？……なんだったの？」

百香は頭にクエスチョンマークを浮かべている。まあ、確かに誰にもわからないぐらい地味な作業だからな。無理もないだろう。

「別に。ただ、3日前から今日の今までの風向きと風速を思い出してた」

「へー……って3日前から!? そんなことできるの!？」

僕はメガネをかけると視力は当然、その他、推測に必要な能力が一気に跳ね上がるらしい。なぜ、らしいのかというと僕にもわからないからだ。なぜかメガネをかけると頭がすつきりして、洞察力、記憶力などが上がる。病院にもいったが異常なんてない。僕が聞きたいぐらいだ。

なぜ、そんな特異なことができるのか……と。

「たぶん、こっちだ」

と、暖ちゃんが指していた方を指さす。

「やっぱり! ほら、のんの方が正しいもん!」

「ムスツ」

翔太君は機嫌が悪そうだ。確かに自分が間違っつて、妹にそんなこと言われたら少しは腹立つと思うんだけど……何か違う気がする……。

「間違いなんて誰にでもあるわ。間違いばかりしている人もたくさんいるのよ」

「それは僕のことだろう!」

なぜ僕を間違いのエキスパートに仕立て上げようとするんだ……

「社長、自意識過剰ですよ。誰も社長のことは言ってます。」

「そうだよー、双芽君は間違いなんてしてないよ。だから……元氣出して」

「その慰め方が腹立つんだよおおおおお！！！」

このままじゃラチがあかない。そう判断した僕は、多分目的地であろう方へと歩くことにした。確かこつちには川があつたと思うんだけど……まあ、メガネかけてない僕の記憶力なんてそんなもんさ。

○

ほんとに川があつた。僕は川の近くの長い草むらばかりの場所を歩いている。いや、正確には探していると言った方がいいか。ハンカチを探しているのだ。僕の推測ではこちらへんに……。

「双芽君、あつたー？」

「いいや、真琴は？」

「ありません。ほんとうにここであつてるのかと疑ってもいいですか？」

「それを僕に聞くなよ！！！」

この川は大きい、しかしそこが浅いのだ。そしてまわりには明らかに手をつけていないという感じにのびきった草、草、草。邪魔くさくてしょうがない。そして上には橋ともいづらい小さな橋がある。

その橋には一応柵があるのだが、まわりが木で囲まれてるため柵がなくとも安全なようになってる。

「それにしても結構探してるんだけどな」

「やっぱり間違ってたんじゃないの？」

「そう言われると……な……」

くそっ、どういうことだ。久しぶりに使った能力だからまだ万全じゃなかったのか……。

「お兄ちゃんたち……あった……!?!」

川の中でも危なくない高い位置に待たせている、暖ちゃんの声が聞こえた。

「ごめんな……!?!もう少しかかるかも……!?!」

と僕が暖ちゃんの方を向いたとき。

「!?!」

気付いた……探すのに夢中になりすぎたか!?!その場にいたのは暖ちゃんだけ。翔太君が……いない!?!

「翔太君がいない!」

ようやく口が思考に追いついた。

「え!?!」

「!?!」

その声に気付いた百香や真琴も顔を上げる。

「ほんとだ……いない!」

「どういづことですか!?!」

くっ! 焦る僕らに対し暖ちゃんは、

「トイレ行ってくつて言ってたよー!?!」

「……なんだあ……焦ったあ」

「驚かさないでください、社長。」

違う! 違う! 違う!?! 翔太君はトイレに行つてない!?! 今気付いた! 翔太君が僕らに会つてから不機嫌だった理由。

それは嫉妬。

思えば僕が推測したり、暖ちゃんにお兄ちゃんと慕われるたびに不機嫌になっていた。それは本当の兄というプライド。見ず知らずの僕らが暖ちゃんなつかれたり、自分が活躍できなかつたりという嫉妬があつたのだ。だからあの時、暖ちゃんとは真逆の方向をさしたのか……。僕らをハンカチまでたどり着かせないように。そして自分がハンカチを見つけ出すために。

「ちくしょう!」

なぜ気付かなかつた! 今の翔太君ならどんな危険なこともやりかねない!

「双芽君、どうしたの？」

「翔太君はトイレに行っただんじやない！ハンカチを1人で探しに行っただんだー!!」

「え？それってどういう……」

「社長！橋の上です!!」

「!!」

真琴の声が聞こえ上を向いて見ると……橋の柵の上のった翔太君が見えた。まるで今から飛び降りかねない様子で。ニユースでやってた飛び降り自殺のように。

「翔太君!!危ない早くそこから降りて!!」

「……」

僕の声には耳もかささない。くそ!どうしたら!!すると橋の近くの木に赤いハンカチがひっかかっているのが見えた。まさか……あれをとろうとしてるんじゃない……。

「翔太君!!無理だ!!」

僕は必死になって叫ぶ。ハンカチがひっかかっている木だけ橋から少し遠い位置にある。だからとれるはずない!届かない。僕の声じゃ届かない。僕は急いで橋まで行こうと走ろうとした時……

「お兄ちゃんーん!!戻ってきてよーん!!」

暖ちゃんの声が聞こえた。

「そこ……グス……危ないよーん!!!!」

ザッパアアアアアアアン！！

水の弾ける音がした・・・・・・・・。。。

○

僕は間一髪で間に合っていた。翔太君は背中を受け止めて、顔面は水の中。

「翔太君！よかった・・・・・・・・」

「もう無理はやめてほしいですね。」

「お兄ちゃん・・・・・・・・なんでそんな危ないこと・・・・・・・・」

「だって・・・・・・・・」

「僕の背中の上で会話始めるの！？」

もうそろそろ酸素がなくなってきたのでおもわずツッコんでしまった。背中から翔太君を下し、そして会話を再開することにした。

「翔太君は妹が大好きなんだもんな」

「なっ・・・・・・・・！」

翔太君が照れ隠しに蹴ってくる。しゃれにならない痛さなんすけど・・・・・・・・。

「翔太君は暖ちゃんのために、兄としてハンカチをとってあげたんだもんな」

「うん・・・・・・・・。」

「でも、お兄ちゃん。なんであんな危ないこと・・・・・・・・」

「だから……その……のんのが大好きだからだよ！」

「お兄ちゃん……」

顔を赤らめる暖ちゃん。微笑ましい兄弟愛。うん！いいね！

「でも、もう危険なことすんなよ」

「その……ごめんなさい」

「わかればいいさ」

「へへっ……ありがとう。お兄ちゃん！」

その時見た笑顔は一生忘れられないくらい輝いていた。

○

「報酬もらわなくてよかったの？お兄ちゃん」

ニヤニヤしながら聞いてくる、百香。あの時から4時間後。僕らは事務所に帰って来ていた。いつも通り中央のソファに座ってゲームしてる。今は日曜日の午後7時だ。

「やめて！お前が呼ぶとなんか違う危ないお兄ちゃんに聞こえるよ！……まあ、いいんだよ、もうもらったさ。十分に」

なんてかつこいいセリフを呟く僕！どう？かつこいい？

「でもまさか翔太君があんな危険な行為をするなんて」

「兄にはな、譲れない時があるんだよ」

「1人っ子が何言ってるの？でも双芽君の推測でも分からなかったんだね、あんなこと翔太君がするなんて」

「僕のはあくまで推測。できそこないの推理さ」

そう、できそこないの……なにも根拠のない推理……それが推測なんだ。

「ふーん、でもよかったね。2人かなり嬉しそうにお礼言って帰ったじゃない」

「ああ、ほんとによかった。ほんとに……」

といいつつ僕は考え事をしていた。なぜ翔太君は仰向けに落ちたのか。前にあるものをとろうとしたら普通はうつ伏せに落ちていくはず。おかしい……なにか引つ掛かる。

「社長、コーヒー……」

「わあ、ありがとう、お姉ちゃん」

「に塩酸を入れることにします。」

「すいませんでしたー！！」

殺す気！？そこまでいく！？まあ、僕でも腹立つけど……。

「真琴。今日の事件、記録頼む」

「わかりました。社長の顔面がずぶぬれになった……と。」

「それだけじゃなかったよ！今日の僕！」

なんて普通の会話をする。さあ、今日は久々に疲れた。依頼これから増えるといいんだがね。

「さーで、今日は夕飯どっかで食べてくか」

「ほんと！双芽君！おごつてくれるの!？」

「え!？そんなつもりじゃ……」

「甲斐性なし……ふっ、今一番似合う人を見つけました。」

「それ僕のことだよね。まごうことなき僕だよね」

まあ、しょうがない。今日はいいか。

「よっしゃー！今日は僕のおごりだー！」

「やったー！」

「作戦成功です。」

僕らも笑顔だった。まったく、伝染するものだな笑顔は……。
この後僕の財布が軽くなるのは言うまでもない。……。
はあ。

第2話解決編〜アニトシテノプライド〜（後書き）

ちよつと長くなりましたがどうでしょうか？えっとこれでこの兄弟の話は完結です。

でも難しいです。小説書くの。

まだまだ注意すべきところがあると思うので指摘、感想待ってます！
。 次回はどんな依頼人がくるのやら。もしかしたらこないのかな・・・

第3話問題編くタイムミットカイシく

「金が足りない……」

僕は1人パソコンにむかって嘆いていた。ちなみにパソコンで見ているのはもちろん、推測屋の掲示板だ。依頼なんてあの兄妹以来全くきていない。

「もうそろそろまずいよな……」

ここは都会。なのでこのビルの1階だけしか使っていないとしても、かなり家賃は高い。このままじゃ今月分が払えないという危機的状況なのである。

「バイトでも始めるかな……」

「えー！だめだよ。推測屋がおろそかになるでしょ」

「おろそかになって困るほど働いてねえよ」

今、僕に文句を言ったのは、江戸城百香^{えとじろももか}だ。推測屋のことを一番真剣に考えてるやつでもある。

「社長の力でお客集めでもしましょうか。」

「どうやって?」

「このビルの前で死んでください。」

「無理だあああああ！っていうかそれ、じゃじゃ馬集めにしかならないから!」

僕に無茶な要求してきたのは学舎真琴^{まなかみやまこと}。秘書みたいなやつなんだけど、毒舌。

僕のことをなにも考えていない。

「双芽君、髪ふためのびてきたよね」

「でも切る金さえもつたいないからな……」

「なら切つてあげようか！」

「断る」

双芽というのは僕の名前だ。新野双芽しんのふため。変わっている名前だろう。

学校のある日は学ランできている。髪は黒くて、長すぎず、短すぎない。肩ちよい上ぐらいまでのびてる。クセがあるのでアホ毛が目立つ。

「どうしてー？」

「お前、かなりの不器用だろ」

そう百香はかなり不器用なのだ。よく今まで事務所のもの壊さなかつたなと褒めてやりたいくらい。ちなみに事務所には大きい机がかなりあり、上には資料ばかりがならんでいる。でも決して狭いとは感じないつくりになっている。

「暇だー！ー！」

ピンポン

「この音は……まさかチャイムだと……」

いつぶりだろう……このチャイムを聴くのは……依頼がなく人がこないから全然聴いてなかった。ほんと泣けてくるな。

「いらっしゃいませー！どうぞ入ってくださいー！」

と魚屋、八百屋なみの声をだす。

ガチャ

「えーと、依頼をしたいのでござるが・・・」

んっ！ござるっ？

「山名氏、それは唐突すぎでござるよ。まずはあいさつからでござる」

山名氏？

「えー、では、自己紹介から。拙者は山名・F・フロイジャー」

「私は、佐島・A・イレティブでござる」

「どこの国の名前！！！！！？？？？？」

ちゃんとツツコめたのはここからだった。

○

「えーと、では山名さんと佐島さんでしたよね」

「いいえ、拙者のことはフロイジャーと」

「私のことはイレティブとお呼びください」

どうしよう・・・ハードルが高すぎる・・・。。。。。。変な一発芸

するより恥ずかしい。ちなみにもう二人はソファに座っている。僕
まだ何も言っていないんだけど。

「えーと、ではフロイジャーさんとイレティブさんは……お
い！そこ！そんな目で見るな！」

百香と真琴が冷たい目で見てきた。しょうがないだろう、こいつら
が呼べというんだから！

「あそこのお二人は？」

「ああ、クラスメイトの江戸城百香と学舎真琴だ」

僕の紹介にあわせて、お辞儀する二人。

「百香さんと真琴たんですね。わかりました」

「お二人とも可愛いですなあ」

「たん！？なにもわかつちやいねえよ、こいつら！」

一応むこうの方が年上なのだが敬語を使う気になれなかった。そし
て百香がすごく青ざめている。真琴は殺気かなりでているが、こ
の能天気バカ二人には何も届いてないみたいだ。

「そしてもう一つ、質問なのですが、あなたは高校生で？」

「ああ、まあそうだが。僕は高校1年生だ」

「それでももう事務所など開いているのですか！アニメみたいでワク
ワクしますな」

話がかなりそれてきている。ちなみに山名さんはぼつちやりとした
体型でチェックのシャツをジーパンにいれていて、頭にはハチマキ
をつけている典型的なオタクと呼ばれるものだった。佐島さんは山

名さんより少しやせていて、服装は同じ。丸いメガネをかけている。ああ、フロイジャーさんとイレティブさんか。忘れてたよ。その名前。

「それにしても二人とも、バッグがパンパンだけど、どこかに行ってきたの？」

「もちろんでござるよー！」

「秋葉原に少々用事がありました」

この話は聞いてはいけない気がした。別にオタクをバカにするわけじゃない。むしろ趣味に熱中できることはすごいことだと思う。僕がバカにしてるのはこいつら自身だ。話が全然進まねえから。

「ん？」

とここで僕は山名さん改めフロイジャーさんのカバンにアニメキャラがプリントされていることに気付いた。見た感じ小学生のピンク色の長いツインテールの女の子がプリントされている。服装は……いわゆる魔法少女といった感じ。服の色もピンクでひらひらしたもののやとところどころ露出しているところがある。

「そいつはなんだ？」

「ああ、これは拙者が好きなアニメの主人公でござる」

ちなみに自分のことを拙者というのは山名さん改めフロイジャーさん。私というのが佐島さん改めイレティブさんである。

「ふーん」

なんとなく聞いただけで特に意味はなかったのだが、急に山名さん

改めフロイジャーさんが話しだした。

「ちなみにタイトルは……」

「ああ、いいいいいよ。別にそんな興味ねえし」

「なんでもお金で解決！非合法ちゃん！というのでござる」

「どういふ物語！？そいつ見た目小学生なのになにやってんだよ！」

ツッコミどころ満載だった。「非合法ちゃん」と言いながら、山名さんはカバンを撫でている。おいおい、そいつの名前が非合法っていうのかよ。

「で、本題に入るが、依頼はなんだ？」

ようやく聞いた。もう話はそれないだろう。

「では私たちが依頼するに至る前の話でもしますか。3時間はかかるでござるが」

「まだそれる気！？もういいから依頼内容だけ言えよ！」

ていつか百香と真琴さつきから一言もしゃべってねえ。僕だけじゃ辛いんだけど。時間帯的にはもうお昼すぎだった。ほんとにはやくしてほしい。日が暮れちまうわ。

「では、単刀直入にストレートでいかせてもらうでござる」

「お、おう。」

急に真剣な表情になった山名さん。実は結構困ってんのか。じゃないとこんな顔しないだろ。

「お昼のアニメ再放送を見たいのですが」

「もういやあああああああああああああ！！！」

僕の心はとうとう折れた。

○

アニメが終わり、ニュースがやっている。また飛び降り自殺か。最近多いな。次のニュースに変わって爆弾魔のニュースをやっていた。僕はテレビを消す。あれから30分後、ようやくアニメを見終わりに息ついた山名さんと佐島さん。

「今度こそ、依頼内容を言えよ」

「わかってるでござるよ。そう焦らないでください」

お前らのせいだろうが！とキレたかったが話がそれるのはもううんざりなので心の中にしまっておく。

「実に軽い事件なんですけどね。私たちが秋葉原のお店をまわっていたら……」

佐島さんが一息ついて笑顔で言う。

「爆弾を見つけちゃいました」

「お前らほんとになんでうちの事務所来たの!？」

警察に話せよと思う僕の心を読んだのか、山名さんがゆっくりと話し始める。

「爆弾を見つけたのは某人気アニメグッズショップの外なんですよ。確か残り3時間ぐらいでしたかな？偽物だったら恥ずかしいので警察ではなくあなたたちに依頼してきたでござる」

「お前ら、ここ『推測屋』だぞ。爆弾解析なんてできねえよ……ん？」

そこで僕は重要なことに気付いた。

「お前ら見つけてからここにくるまでどのぐらいの時間かった？」

「えーと、その後も買い物したので1時間半ぐらいですか？」

「で、今ここでアニメをみて、30分たったと……」

「もうあと1時間しかねえ！！！！！！」

「えー！？」

「！？」

さっきまでだんまりだった百香と真琴も驚いている。

「と、とりあえず秋葉原のそこまで案内しろ！ここから何分かかる！？」

「だいたい40分ですかね？」

「本物だったらまずいぞ……急いで行く準備しろ！」

僕らは急いで準備して5分経過。

「いやぁーまさかここまでおおごとになるとは……ハッハッハ」

「えー！？ここキレていいよね！殴り飛ばすぞ！！」

僕らは急いで駅へとむかった。無論こいつら二人とも反省の色は見
えなかった。

爆発まで残り55分。

第3話問題編〜タイムミリットカイシ〜（後書き）

今回は問題だけで終わってます。

ここまで読んでくれた人は分かってくれてると思いますが、普通の推理物とは少し違う作品となっています。

どうだったでしょうか？今回の話は。

指摘に感想待ってます！

次で解決するんでしょうか？僕も不安です。

第4話解決編〜ニセモノトホンモノ〜（前書き）

これは解決編です。先に前の話の問題編を読んでください。

第4話解決編〜ニセモノトホンモノ〜

「なるほどね……………」

がっかりだ、非常にがっかりだよ。僕らは今秋葉原の某アニメグッズ店の裏のさらに隅にいる。今は6月もう少しで夏がくるのか暑さは勢いを増していた。まあ、実は半信半疑だったんだ。なのに……目の前には…………。

「爆弾…………だよなあ……………」

爆弾があった。しかも残り15分。とりあえず警察呼ぶしか…………。

「警察を呼びます。」

迅速な行動。さすが真琴だな。

「ストップでござる!」

「警察は偽物だったら恥ずかしいという理由で呼ばないのでは!?!」

「この後に及んでよくそんなこと言えるな!」

心底あきれろ。こいつらには人の命は恥ずかしさに負けるのか……でも何かおかしい。こいつらはそんな薄情なやつじゃないと思うんだ。

「じゃあ、とりあえず、ここの店の店長にでも報告する?」

「それもやめていただきたい!」

「なんで!?!」

「いや、ね・・・迷惑かけるわけには・・・ねえ」

「ここでこの5人の死体がまき散らされてた方が迷惑だろ!!」

特に掃除が大変そうだ・・・うえ、想像するんじゃない。気持ち悪い・・・。でも、やはり変だ・・・。こいつらが依頼してきたのに、爆弾処理を他人に任せるのを拒んでるような・・・。

「はぁ・・・そういうことか・・・」

「なにかわかったの!? 双芽君!」

百香が笑顔をむけてくる。この笑顔が僕の言葉で崩れるのは少し残念だが・・・。

「犯人はこのオタク。お前ら二人だろ」

「「!!」」

「どういうこと?」

「説明してください。」

説明を求めてくる百香と真琴。簡単なことなんだけどな・・・。

「こいつら2人はお前らに会いたかったんだよ」

「「はぁ!?!」」

その驚きはよくわかる。僕ももううんざりだからな・・・。この茶番を終わらせることにした。

「こいつらは美少女が大好きなやつらだぞ。お前らに会ったための口実だったんだよ。爆弾は」

そう、こいつらは美少女大好きオタク。もうこの結論しかないなと

確信した僕は、次々と証拠にもならない「できそこないの証拠」をならべる。

「この爆弾を偽物だとすれば、全てがぴったりおさまるんだ。警察を呼ばなかったのは、偽物だとばれるから。店長を呼んで騒がれても困るだろうし」

そして……

「まず、こんな隅の隅の爆弾をたまたま来たお前らが発見できるわけないだろうーが!」

そうここは、店の裏のさらに隅の隅。こんなところ偶然きたやつが発見できるわけない。僕の「できそこないの推理」、すなわち推測が幕を閉じる。

「どこかの噂でこいつらのことを聞いたお前たちは、会う口実をつくるためにこんなことをしたんだろう。そしてタイムミットが過ぎたとき……」

その瞬間爆弾の時間が0になった。……爆発は起きない!よし!そのかわり、「ドッキリ大成功」という紙がでてきた。

「な。ここまでして会いたいものなのかどうかはわからないが、こいつらは美少女のためならなんだってするだろうな。だがアニメにはかなわなかったのか時間がないのにきちんとアニメは見てたよな」「拙者たちがしたという証拠は!？」

「証拠……?……これは推理じゃない。『できそこないの推理』すなわち、推測だ。あとはお前らが認めればいい話だぞ」

オタク2人はまるで重大犯罪を犯した犯人のように崩れ落ちた。

「拙者たちの」

「完敗です」

僕らの勝ちが決まった。っていつか無駄すぎるだろ、この時間!!!

「わたしたちは百香さんと真琴さんに会うためだけにこれをやったんじゃないんです」

「は？他に理由は？」

「高校生が推測屋というのをやっているということを知ってきたのもあるんでござるよ」

「ってことは？」

「あなたの双芽氏の推測を見にきたという理由でもあるのです」

「・・・僕は試されてたってことか」

「まあ、気分を悪くしないでくれでござる。でもこれでわかったでござるよ」

「拙者たちの同人誌作りは成功しますと」

「え？」

何言っただんだ・・・同人誌というのは確か、自分で作った漫画のことだったはず。これを売ったりするんだよな。・・・まさか・・・。

「今回の件は漫画にさせていただいてくださる」

「お前それが理由か!!!」

百香と真琴に会うのも漫画にでてくる登場人物のイメージをつかみ取るためだったのか・・・。

「ざっけんな！せめてギャラくれ！」

「注意すべきはそこじゃないと思うよ！！」

「そうです。爆破されればよかつたのに。」

「それは誰にいつてんの！？僕！？」

平和。やはりそれが一番だ。そう思った時。

ドカアアアアアアアアアアアアアン！！！！

爆発が起きた……。

「お前ら……まさか！」

「違うでござる！拙者たちは何もしてないでござる！」

そうだ、こいつらが仕掛けるわけがない。秋葉原を愛しているこいつらが。僕は黒ぶちメガネをかけた。

キユイイイイイイイイイイイイイイイ

これは……火薬のにおいが多い……ってことは爆弾じゃないか……。

「ダイナマイトだ！！近い、行くぞ！！」

「ダ、ダイナマイト！？そんな爆弾騒ぎは終わったかと思ったのに……」

百香が残念そうな顔をする。僕も非常に残念だ。僕はここに来る前に見ていたテレビを思い出す。確か飛び降り自殺の他にもう一つ爆弾の事件があったはず！

○

僕は近くの電気屋にきていた。その電気屋で爆発が起こったのだ。今でも煙がでている。何人ががにげようとして僕にぶつかる。黒いコートのやつやパーカー、オタクの格好したやつとか。

「おいおい、マジかよ。ほんとに爆破事件……だと……」

でもダイナマイトなら爆弾と違って犯人がギリギリまでその場にいなければいけない。導火線は時間制限などつくってくれないからな。

「ってことは……」

この人ごみの中に犯人がいる……。だが人が多すぎる!!!これなら推測もできない……。いや……。待てよ。あくまで推測だがダイナマイトというのは予備というものも必要じゃないのか?爆弾と違い少し威力がないダイナマイトは爆破をちゃんとするためにはある程度の本数があるんじゃないのか……。?さまざまに「できそこないの証拠」。

キユイユイユイユイユイユイ

誰だ……。誰が犯人だ……。そう思った時、ふいに思いついたことがあった。長袖長ズボンの人はいても、上着をはおってるやつなんていないはず。今外はかなりの暑さだ……。

「!!!黒いコートの男か!」

僕にぶつかってきた黒いコートの男を追うために走り出した。

「ちょっと！双芽君どこに行くの！？」

○

「待てよ。お前」

「ん？何かようがあるんか？」

そいつは関西弁だった。黒いコートを着て、髪はかなり長い。長髪だ。歳は20歳前半で、美形だがなんかニコニコしてる。笑ってるのだ。

「子供の戯言だと思って、スルーしてもいい。お前爆弾犯か？」

「証拠は？」

男はニコニコしながら言った。

「いや、黒いコートの中にダイナマイトがあるんじゃないかと思っ
て……」

すると男は上着を脱いだ。中にはなんの変哲もないパーカーにダボ
ダボのズボンがあるだけだった。

うそだろ……推測が外れた……ポケットの中にもなさそうだ。
一切ふくらんでない。

「えっと、すみません……」

「はっはー！ええよ。少年！確かに人は誰でも疑った方がいいからなあ」

めっちゃフレンドリーな人だった。ええ人やん。

「少年の推理はおもしろいなあ」

「推理じゃないです。ただの僕の推測ですよ」

「そうか、少年の推測は間違っていることが2つあるで」

「なんででしょう？」

僕は本当にそれを知りたかったのできいてみた。ただ興味本位で。

「一つ目ここにダイナマイトはない」

「それはわかってます。僕が間違ってたんですから」

「二つ目……」

その瞬間僕の耳元で囁くように言った。

「爆弾犯やちやうで……爆撃屋や」

「な!？」

振り向いたときその男はもうすでにいなかった……騙された！簡単に！あいつが犯人だったのか！！

「爆撃屋……か……」

○

場所は事務所。いつもの中央にあるソファに座ってゲームしていた。

「双芽君勝手に行っちゃうんだもん。驚いたわ」

「悪い。ちよつと・・・な」

「大方、犯人の目星をつけて、それらしい人にバカ正直に聞いたんでしよう。犯人ですか？と。」

「う!!！」

「ええ!? その驚きかたは凶星なの!? 私もいけばよかった・・・」

「

「危ねえだろうが。僕一人で十分だ」

「ってことは犯人を見つけたの!？」

百香の言葉に僕は首を横にふる。

「いや、タヌキに・・・キツネに化かされて終わりさ」

「？」

爆撃屋。そんなものがあつたのか。この世には推測屋だけじゃなくて様々なお店があるっていうわけか・・・。

「オタク2人は今頃なにやってんのかな？」

「同人なんかかってやつ執筆中じゃないの」

あいつらのことは嫌いらしく百香は嫌な顔をする。

「あいつら、根はいいやつだからさ、ぜひ許してやってほしいんだ」

「別に怒ってなんかないもん」

バレバレだ。あの茶番が気に食わないのは僕も同じなんだけどな。

う一回やり直せば……

「セーブされてる!?!」

「ああ、適当にボタン押したらそうなっちゃった」

「お前の不器用さにもあきれよ!?!」

「だって双芽君がやっていいって言っただんじゃん」

「それはお前らがクリアするとは思わなかったから……」

この言い争いはこの後、僕の負けで終わった。まあ、なんとなく想像ついたよね。

第4話解決編〜ニセモノトホンモノ〜（後書き）

解決編どうだったでしょうか？

若干無理やり感がでてしまいましたが、次の話がんばってみようと思います。

もうそろそろバトルがでるかもしれませんよ。

キーワードにバトルと書いてしまいましたしね。

第5話問題編くダベルコミュニケーション

僕、しんのふため新野双芽はいつも通り掲示板をチェックしていた。が……
依頼なんてあるはずがない……。

「はあ……やっぱもっと大きい事件を解決しないと有名にはなれないよな」

僕が今まで解決してきたことは小さな事ばかり。最近のではハンカチ探しに偽物の爆弾処理。今思ったけどろくなことしてないな。とか思いつつしばらくインターネットをいじっていると……

「なんだこりゃ」

適当に検索して遊んでいたら『フリーダム』というサイトを見つけた。英語ではなくカタカナで書かれていたそれは僕の目に容易にとまった。クリックしてみるとログインページにとんだ。

「それはSNSというものですな。」

「SNS?」

秘書的役割である学舎真琴が声をかけてきた。そういやこいつネットとかパソコン系は得意そうだもんな。

「社長でも分かるように簡単に説明させていただきますと、コミュニケーションをとるための場といったところですね。」

「へえ……」

ごめん、全然分かんない。僕はそれを顔に出していたのか、真琴が

「では、もっと細かく説明させていただきます。」と丁寧に説明してくれた。

要するにそのサイトで仲良くなったやつらがオフ会とかっていうのを開いて現実で会ったり、メッセージでやりとりしたり、コミュニティをつくったりして遊ぶサイトらしい……。僕はまだなにも理解できないが。

「会員登録は自由で無料なんだろ。俺も入ってみるか」

そして僕は会員登録を開始した。メールアドレスに名前、それとこのサイト内での名前も決めるのか……。

「これ名前、何にしたらいいと思う？」

「甲斐性なしか、役立たずがいいと思います。」

僕は推測屋という名前にした。これなら違和感がないだろう。え？……ああ、さっきの言葉は聞かなかったことにするぞ。

「やーて、と」

ここからは初心者の僕にでもわかる説明が書かれていたのでスムーズに進んだ。そして……

「会員登録完了！」

さあて、これから何をしたらいいのかな。

「試しに他の人とやりとりしたらどうでしょう。」

「うーん、確かにそうだな。まずは友達作りからだな」

そうは言ったものの何をしたらいいかさっぱりわからない。どうしたらいいんだ……。

「メッセージを送るのはどうでしょうか？」

「でも相手のメールアドレスなんて持つてゐるわけないだろ」

「はあ……このサイト内ならメールアドレスがなくてもやりとりができるんですよ。」

なんだ最初の溜息は！これだから無能は……。みたいな感じだったぞ！確かに僕はこういうのに関しては無能だが初心者だからしょうがな……。

「さっき説明したんですけどね……。」

うん……。それはごめんなさいだね。まったくもって僕は無能だった。

「うーん、でもメッセージってもっと仲良くなってからやりとりしたいよな」

「でしたらコミュニティに入るのはどうでしょうか。」

「コミュニティ？」

「はあ……そのコミュニティにあつた、人たちが集まる場所です。例えば……これ、これ見てください。」

真琴が指差したところにはコミュニティという文字があつた。僕はクリックするとたくさんコミュニティがあることに気付いた。

「ほら、この『元気だそう会』は元気を出したい人が集まる場所なんです。」

「なんだそのネガティブなのかポジティブなのかわからない会は・・・」

でもなんとなくわかった。自分の興味のある名前のコミュニティに入ればいいんだろう。そう思い僕はマウスを下に動かした。

「えーと、なにになに。『パスタが好きな人集まれ!』って結構ピンポイントなものまであるんだな」

そうやって一つ一つ見ていくとその中に見覚えのあるものがでてきた。

「『非法法ちゃんは大好きですかあ!?!』・・・このアニメそんなに人気があるのかよ・・・」

ちなみに人数も見れるようになっていたので見てみると306人・・・まあまあな人数だった。ちなみに作った人っていうところにフロイジャーと書いてあったのは見て見ぬふりだ。

「うーん、なかなかないな・・・」

「ゆっくり探せばいいんですよ。私はコーヒーをいれてきます。」

そういつて真琴は台所の方へ行ってしまった。ここの事務所には台所まであるのだ。なかなか便利だがその分家賃が・・・。

「なにになに・・・『なんでもいいから駄弁りましょう!』か。これにでもするかな」

僕はそのコミュニティに入ることにした。

○

「双芽君！遅れてごめん！今日委員会があつて………つてなにやつてるの？」

「いや、今駄弁つてるんだ。詳しくは真琴に聞いてくれ」

あれから1時間、今は木曜日の午後5時。僕はすっかりコミュニニテイにハマっていた。

「このネットでも友達ができる感覚つていいよな」

「社長は現実で友達がいませんもんね」

「いないわけじゃねえよ！ただ親友と呼べるものがないだけだ！」

自分で言っていて泣きそうになってきた。まったく真琴は………
。。それに比べてこの『甘宇治^{あまうじ}』さんはなんていい人なんだろう。

「あれ？これメッセージ送れないぞ」

「ああ、それはきつとこのSNSの管理者が禁止にしてるんでしょ
うね。」

「そんなことができるのか？」

「そりゃあ、管理者ですから。ここのSNSはメッセージが送れない
んですね。どんなセクハラメッセージを送ろうとしたのかは分
かりませんが残念でしたね。」

「んなことするわけねえだろ！即効通報されるわー！」

「えー、双芽君セクハラしようとしたのー？私もまだされたこと
ないのに……」

「まだつてなに！？する気なんてこれっぽっちもねえよー！」

百香がふざけはじめた。……のか？なんか少しトーンが真剣だったような……。まあいいや。

「とりあえず今日は依頼もないし、自由行動！」

百香と真琴が買い物に行ってる時も僕はコミュニケーションをとっていた。

○

「えー、双芽君今日出かけるのー？」

「今日は確かオフ会でしたよね。」

「ああ、悪いな。なるべく早く戻ってくるから」

3日後の日曜日。僕は『甘宇治』さんと『マナ』さんの2人とオフ会をすることになっていた。場所はこの前ハンカチ探しにいったお店街。確か「草原」とか呼ばれているはず。その某ハンバーガーショップで行われる。

「私も連れて行って！双芽君が変な女にたぶらかされないか心配だもん！」

「お前は何の心配をしているの！？2人ともそんな人じゃねえよ！」

「あー！ってことは2人と女の子なんだ！」

「そのどどこがいけないんだよ！お前は僕の彼女か！」

「え……彼女だなんて……」

「そこで照れるな！！」

○

なんとか百香を振り切りようやくハンバーガーショップについた。いやー、緊張するよな。まだ顔も声も分かってない中会っただぜ。すごく緊張するよ。

「よおし！」

気合を入れて店内に入る。ちなみに今日の僕の格好はジーパンに灰色のパーカー、中には赤いシャツだ。確か……8番テーブルだったか……。

「ええと、もしかして『推測屋』さんですか？」

8番テーブルに近づいた時、不意に後ろから声がかかった。すごくやわらかい感じのおっとりした声だ。僕は後ろを振り向き……

「はい、僕が『推測屋』です。ええと、もしかして『マナ』さん？」

なぜ僕が『甘宇治』さんじゃなく『マナ』さんと聞いたのか？それはコミュニティの時でもなんとなくおっとりしててやわらかいイメージだったからだ。

「はい！分かってくれて嬉しいですね。今日はよろしく願いします」

ですわ！？まさかここでお客様口調に会えるとは！本当にいたんだな……。とか思いつつも『マナ』さんの綺麗さに見とれていた。顔は美人で優しそうな目。背は少し低く150前半といったところ

だろう。しろい清楚なワンピースにしろい鞆。それらが黒く長い髪を引き立てている……。しかもナイスバディときたもんだ。

まじうことなきお嬢様といった感じ。

「ああ、こちらこそよろしくお願いします」

「『推測屋』さん、かっこいいんですね」

「え!?!」

不覚にもトキめいてしまった……。こいつなかなかやるな! ていうかトキめくつてもう死語?

「いやいや、そんなことはないです。『マナ』さん、すごい可愛いですね」

「え? ……そんなこと言われたの初めてで……。照れますわ」
そんな反応を期待してたんじゃない! このままじゃ僕はそこらへんのナンパ野郎と変わらないじゃないか! おかえしのつもりだったのだが……。まあ、本当に可愛いんだけどね。

「では、テーブルにつきましょうか。」

「ええ」

僕は椅子を引いてあげる。なんかお嬢様に仕える執事になった気分だ。その時後ろから声をかけられた。たぶん『甘宇治』さんだろう。

「えつとここが8番テーブルでいいの?」

「ああ、そうだが」

相手があまりにもフレンドリーに話しかけてくるので敬語を忘れて

いた。すると『甘宇治』さんが・

「あたしは『甘宇治』。べ、別にあなたたちのために来たんじゃないんだからねっ！」

僕の嫌な予感センサーが反応してる。『甘宇治』さんはツンデレにツンデレを足したようなツンデレだった。じゃあ、誰のために来たのだろう。

すこし茶色がかった長い髪の毛がツインテール、すなわち2つに結ばれてる。身長は150後半ぐらいだな。ピンクがかかった半袖のTシャツにどこかのアイドルのような赤いチェックのミニスカート。胸は発育に乏しいらしいが、顔はすごく可愛い。目がつり目である。

ちなみにここまで分析する僕は変態じゃないと言っておこう。

「えっと、よろしく」

僕は少し困った感じで返した。なぜか僕の今の状況は漫画の世界に入りこんだようだった。

第5話問題編〜ダブルコミュニケーション〜（後書き）

はい！今回の話はどうぞでしょうか？

とりあえず、今回は始まりといった感じなのでなんとも思わないかもしれませんが

これから盛り上げていこうと思います！

第6話解決編くオンナノコノムズカシサく（前書き）

これは解決編です。先に前の話の問題編を読んでください。

第6話解決編くオンナノコノムズカシサく

いやー……まいったね。まさか生涯で女の子2人と遊ぶことになるうとは。しかも男は僕1人。どうだ男子諸君、羨ましいだろ。……僕の心は折れそうです……。

「あらあら、どうしたのかしら？ 『推測屋』さん。ご飯を食べましよう」

「そうよ、べ、別にあんたに食べてほしくて言ってるわけじゃないんだからねっ！」

「はあ、いただきます」

まあ、こんな感じだ。これで一応、全員初対面なんだぜ。『甘宇治』さんなんてツンデレ大安売りだし。あれは普通気になる異性に対して言うものじゃないのだろうか。初対面の僕に言っただって、ただいちいちニュアンスが変わるだけである。

「あ、えつと僕の名前は本当の名前の新野双芽しのふためで呼んでください」

「私たちに本当の名前を教えていいのかしら？」

「そうよ、オフ会で犯罪とかもおこるんだから。心配して言ってるわけじゃないのよ！」

「一応、僕、推測屋という探偵みたいなことしてるんで、逆に名前覚えてもらったほうが仕事のいいんですよ」

これは本当のことだ。そんな美少女に本当の名前で呼んでもらいたいなんていう邪な考えなんて微塵もないといえば嘘になるな。

「その年齢で大変ですわね。何か困ったら相談することにしますわ」

。 じっくりと笑顔で言ってくれる『マナ』さん。癒されるな……。

「そこまで言うんだったら相談してあげてもいいけど……」

頬を赤く染めて言う『甘宇治』さん。まだ僕は何も言っていないはずだけど。でもその照れる仕草は可愛いと思わせる何かがあった。

「はい、どんなことでもやりますよ!」

僕は2人に今日のために用意していた名刺を渡す。真琴に作ってもらったのだ。浮かれてるとかセクハラとか言われ続けながら。途中でマジ泣きしようかと思った。

「では双芽さん、私の本名は岩城涼香いわしろすすかですわ。よろしく」

「あたしは咲野火口さきのくち。よろしく」

「えっと、岩城さんに咲野さんですね。よろしく」

「名前でもいいですよ。もう私はもう名前と呼ばせてもらってますし」

「あたしも名前でもいいわよ。さんとかちゃんとかつけないで。呼び捨てでもいいわ」

「わ、私も呼び捨てで!」

岩城さん……じゃなくて涼香は何を焦っているのだろう。声を荒げるほどのことでもないと思うんだけど。

「分かりました。涼香に火口ですね」

「敬語もだめ!」(ですわ!)「」

「はい……じゃなくてうん……」

まだ会ったばかりなのに、何もしてないのに体はかなり疲れていた。仲良くはなれたよね。うん。

○

そんなこんなで昼食を終え、今は道を歩いている。女の子2人に挟まれて。これは羨ましい構図だろうが、そんな甘いもんじゃない。こんなただ緊張するだけだ。もうほんとに疲れた。

「2人はどこか行きたいところある？」

「名前と呼んでくれないと嫌！—（ですわ！）」

「す、涼香と火口はどこか行きたいところある？」

「双芽（さん）の行きたいところ」

僕に死ぬというのだろうか。僕は女の子の喜びそうなところをまったくもって知らない。そんな経験なんてあるはずないだろう。早く帰りたい衝動に襲われる。

「じゃあ、とりあえずデパートにでも行こうか」

「はい！」

もうどうにでもなれよ。僕は自分の運命だと思い、諦めた。

○

「双芽さん、これ似合いますか？」

「ああ、とっても似合ってるよ」

「双芽！あ、あたしのはど、どっつ？」

「うん、似合ってる。可愛いよ」

現在デパートの洋服売り場にきている。女の子はそういうのが好きだと聞いたことがあるからな。

「双芽さん、この服ボタンのかわりに磁石でとめられますよ」

「お、ほんとだ。すげえ磁力だな」

「双芽、このズボン、チャックのかわりに磁石でとめられるわよ」

「それはどうなんだろう！磁石じゃ社会の窓がわりにはならない！？」

僕は楽しんでた。僕も自然と彼女たちの笑顔にひかれていたんだ。

○

体格のいいゴツイ男と背の低いやせた男がいた。

「特別な銃の準備はできたか？」

「はい、できました！兄貴、これを使ってください」

「これが……改良に改良を重ねた銃……いいじゃねえか」

「今度も成功させましょう！」

「ああ……くくっ」

○

現在僕らは休憩中だ。店内のイスに座ってジュースを飲んでいる。近くにゲームセンターがあるのか少し音がする。

「今日は楽しかったですわ。ありがとうございました」

「あ、あたしも満足したわ。べ、別にあんたのおかげなわけじゃないんだからねっ！」

「そんな、僕の方こそ楽しかったよ」

火口のツンデレ口調にも慣れてきたとき、別れの時間がせまってきた。まあ、疲れたし帰ろうかと思った時……

「少しそこらへんを見てくださいわ」

「あたしも」

「それなら僕もついていった方が……」

「「デリカシー」」

「え!？」

そう言つて、彼女らは2人で行ってしまった。なんかよくわからんが、まあ、きつとすぐ帰ってくるだろう。

○

あれから1時間。まだ帰ってこない。いくらなんでも遅すぎないか……やむをえず、店員に聞いてみることにした。

「ああ、その子たちならトイレに入ってたよ」

「そうですね、ありがとうございます」

トイレに行きたかったのか。だからあのときデリカシーといったんだな。でも女子のトイレは1時間もかかるのか……。？それを店員に聞くと警察に捕まりそうなので聞くわけがないが。そのとき・

・
「さつさと金をだせえ！！！！！」
「！！！！！」

野太い男の声がきこえた！今は……。宝石店の近くか！！！！
僕はゲーセンの近くの宝石店へと急いだ。

○

「さあ！さつさと金をだせえ！！！」

「この子たちがどうなってもいいのかあ！！！！！」

ようやくついた。しかし……………。

「涼香に火口……………！」

涼香と火口が人質にとられていた。うそだろ……。ちっ！なんとかして助けないと！しかし強盗犯の手には拳銃……。ただ行っただって撃たれるだけか……………。

「この銃は先端に強力な磁石がついていてな……。こいつが弾に磁力を持たせ、金属を持っているやつには必ずあたるという仕組みに

なっているんだよ……!!」

「さーて……この中で、金属をつけているのは何人いるかな……
・従業員さん」

しかも必ずあたる銃だつて！涼香と火口は確かアクセサリーをつけていたはず……どうすれば……。

「そつだ……」

僕はきづいてその場から離れた！急げ！時間はない……!!

○

「さあ、もうそろそろ逃げるか」

「そうですね。兄貴、こいつらどうしましょうっ」

「かまわん。ぶちぬけ」

「くっ……双芽さん……」

「助け……て……」

「任せろ」

「……!!」

へへっ！4人とも驚いてるな。まったく、僕が助けにきたことがそんなに不思議なのかよ。今の僕はメガネをかけた、推測モードになっている。

「誰だ！てめえ、風穴あけるぞ……!!」

「それは銃が撃てるやつが言うもんだぜ」
「なめてやがんのか！死ぬ！！！」

そう、僕の推測だとやつらの銃の先端についている弾に磁力をもたせるもの自体も磁石になつてはるはずなんだ！とてつもなく強力なやつな。だからその穴をふさいでしまえばいい。

「いっけええええええええええ！！！！！！！！！！」

僕はさつき涼香と火口が見せてくれた、ボタンのかわりに磁石でとめる上着とチャックのかわりに磁石でとめるズボンを持ってきていた！！！！

「なんだと！？」

「あ、兄貴！磁石がちょうどよく弾がでる穴をふさいでいます！！！」

「くつくそお！！！！外れねえ！強力な磁力なことがここで裏目になるとは！！！」

「脇役は脇役らしく沈んでろおおおおおお！！！！！！！！！！」

僕は強盗２人の顔面を思いっきりぶん殴った。強盗はそこで気を失い、起き上がることはなかった。

○

そして帰り道２人と別れる時……………

「えっと、ありがとうございました。私たちを助けてくれて」

「ありがと……助かったわ」
「お礼なんていいよ。友達なら当然のことだよ」

僕は対等な感じが好きなのだ。ここで恩なんか気にされたら僕は逆に困る。

「えっとそのお礼なんですけど……」
「やっぱり助けてもらったしね……」
「ええ！？いやいや、大丈夫だって！僕はそんなことのために助けたんじゃ……」

僕の言葉はここで止まった。なぜなら2人から頬にキスされていたからだ。しかも2人だから両サイド。

「な……」
「こ、こんなお礼でいいならいくらでもあげれますわ。では……」
「べ、別にあんたのこと好きじゃなければいいんだからねっ！」

そう言っただけで彼女たちは帰って行った。僕はそのまま立ち尽くすしかなかった。だって今日あったばかりで手もつないでない……驚きが繋がりすぎてもう何もできなかった。

○

「ただいまー」
「お帰り……」

百香がとてつもなく不機嫌だった。勘弁してくれ。僕はもうただでさえ疲れているのに。でも・・・今日は百香と何もできなかったからな・・・。

「百香、一緒にゲームでもするか？」

「いい・・・やらない」

不機嫌がなおらない・・・どうすればいいのだろう・・・。

「ケーキおごろうか？」

「いらない」

「コーヒー入れる？」

「いらない」

「じゃあ、人生ゲームは？」

「やらない」

一体どうすればいいんだ・・・真琴が「鈍感ですね。」と言っていた。ふざけないでほしい。僕は紳士と呼ばれるほど女の子の気持ちを理解しているんだぞ。

「じゃあ、どうすればいいの？」

僕はたまらず聞いた。

「じゃあ、ちょっと横むいて」

怖い怖い怖い！何する気！？ビンタ！？ビンタなの！？でも従う他ない僕は横をむいた。そして・・・

頬にキスされた。

世の中はどうなっているんだ。おかしいとしか思えない。

「これで許してあげる。じゃあ、ゲームしようか」

「意味が分からねえよ！からかってんの！？」

「さーで、どうでしょうねー」

「社長、鈍感もいいかげんにしてください。」

「なんでお前に怒られなきゃいけないんだよ！」

この後、僕は夜8時ぐらいまでゲームに付き合わされた。まあ、一人暮らしだし、親に怒られることはないんだけどね。宿題が終わってないんだ。もう今度こそ勘弁してほしい。

今日の僕のアンラッキー体の部位占いはぶっちぎりで頬が1位だと思っただ。

第6話解決編くオンナノコノムズカシサく（後書き）

今回どうでしたでしょうか？

なんか女の子成分が足りないと思い、今回の話に至りました。
モテモテ回ですね。

話がうごきだすのはもうそろそろです。

第7話特別編〜ミンナノキモチ〜（前書き）

これは前の話の問題編、解決編をみてから読んでください。

第7話特別編〜ミンナノキモチ〜

「やっぱり気になるよー!!」

と私、江戸城百香は立ち上がった。

「社長のことです。心配はいらなと思いますよ。あんなへたレにはなにもできません。」

っていう学舎さんだけど、たぶん学舎も気になってるのかさっきから仕事に集中できてない。そこで私は提案した。

「ちょっとだけ、本当に少しだけ見に行かない？学舎さんも気になってるんですよ」

「た、確かに気にならないと言えば嘘になりますが・・・」

「なら決定！行きましょう！」

ということと私たちはオフ会に行った、双芽君ふための後をつけることにした。つけるなんてそんなやましいことじゃないよ！ちょっと、ちょっとついていくだけだから！

○

待ち合わせはどうやら「草原」にある某ハンバーガーショップらしい。私たちは少し離れた席に座っている。すると双芽君に誰かが話しかけた。

「わあ・・・すっごく綺麗な人・・・」
「なんかお嬢様って感じですね。」

ほんとそのまんまお嬢様っていう感じだった。これなら双芽君もよからぬことを考えちゃうかも・・・ど、どうしよう・・・。

「あ、もう1人きました。」

「え!?!どれどれ?」

ほんとだ。確かにまた双芽君に話しかけてる。今度はツインテールで強気そうな女の子だ。

「ど、どどどうしよう。またまた可愛い人だよ」

「そんなに焦らなくとも大丈夫だと思いますよ。」

昼食を食べ終わったのか双芽君たちはお店から出て行ってしまった。私たちは罪悪感などなしに普通についていった。ストーカーとかじゃないよ!

「嘘・・・」

外に出た瞬間、女の子2人にはさまれてる双芽君の姿が!そ、そんな・・・まさか・・・女の子と並んで歩くことがあるなんて・・・。

「考えたくありませんが・・・もしかしてモテているのでは?」

「きゃー!言わないでー!」

そんな・・・モテてるだなんて・・・そんなあ・・・。その後、双芽君はデパートに行くようだ。な、何をやる気なんだろ・・・

もうドキドキだよお。。。。

○

「よ、洋服選び。。。そんな。。。これはもう。。。」「デートですね。」

学舎さんが私にとどめをさした。もう私は何も見たくないよ。。。その後デパートのいろいろなところをまわり、いろいろとダメージを受けた私はもう帰る気満々だった。

○

「見に来なきゃよかった。。。」「

「まさか社長が女の子にモテるだなんて。。。考えられません。」

学舎さんはお母さんの視線で見てるようだ。わ、私!? 私は。。。その。。。言わせないでよ!そして気を落とした私たちは帰ることにした。デパートの入り口にさしかかったとき。。。

「よし撃つ準備はいいか?」

「!!!!」

ものすごく大きな男の人がそんな物騒なこと言いだしたよ!私たちはもうびっくり!

「学舎さん!!」

「はい。任せてください。」

すると学舎さんはその男の足を足で薙ぎ払い、転倒させた。そしてこっちにその通信をとってたと思われる携帯電話が滑ってきたので思わず踏んじちゃったよ!

バギン

携帯電話は真つ二つ。私の体重が重いわけじゃないのよ!

「な、何しやがる!!」

するとその人はナイフを持っていた。学舎さんが危ない!!

「学舎さん!!」

「大丈夫です。問題は……ありません!!」

学舎さんはキックでナイフを弾いた!すごい!尊敬するよ!!

「な、くそっ!このアマア!!」

「無駄ですよ。あれから1分もうそろそろここに近い警備員が到着します。」

すると学舎さんが言った通りに警備員がきた!そんなことまで考えていたなんて!

「ちい!だがまだ俺の仲間はあるぞ!そいつらはもう動いてるだろうな……」

「なっ!大変だよ!どこにいるのか分からないのに!」

「いえ、大方、宝石店というところでしょう。急ぎますよ！」

○

あいつとの通信が切れちゃった。まったく携帯壊すとかどんだけドジなんだ。

「いいか、こいつらがどうなってもいいのか！」

「そうだぞ！はやく宝石をつめるー！！」

ここまでは順調。ふっ……このまま逃げてしまえば……。

「双芽さん……」

「助け……」

ああ？何行つてんだこいつら？まあ、ぶちぬいちゃまえばこっちなもんだな。

「任せろ」

不意にその声が聞こえた。なんだあ？あいつは急に登場しやがって。服とズボン持ってヒーローきどりか？こいつらと一緒に風穴開けてやらあ！！

○

私たち、百香と学舎さんが着いた時には強盗はやられていた。そう、双芽君がやったのだ。

「これでも社長に怒りますか？」

「ううん、やっぱり双芽君は双芽君だよ」

「ええ、その通りですね。」

私たちは安心して帰ろうと歩き出した。でも……

「追跡は」

「まだやりますよ。」

最後まで続くよ……。ふふふ、覚悟してね！

○

私は岩城涼香^{いわしろすずか}。今は帰り道の途中ですわ。私はこの双芽さんに恋をしているのでしょか？なかなか目があわせられませんわ。これが……恋……なら。

「ここでお別れですね」

時間がありませんわ！

「助けていただいてありがとうございますわ」

「そ、そんな当然のことです」

け、謙遜するだなんてなんて素敵な方でしょう。

「やっぱりお礼は必要ですわ」

チュツ

わ、私つたらなんて大胆なことをしてしまったのでしょうか。き、キスだなんて。は、恥ずかしいです！とりあえず、顔が赤いのがバレてしまいますわ！

「ま、また会いましょう！め、メールしますわ！」

私は一目散に帰りました。

○

あたしは咲野火口^{さきのひぐち}。こいつに助けてもらったんだけど……。なんかドキドキする……。どうしよう……。好きになっちゃったかも……。。

「さ、さつきはありがとう……」

「え！？いや、友達として当然のことだよ」

あんなすごいことして謙遜するだなんて。すぐ横の涼香が何か決意した目をしている……。まさか……。あ、あたしも負けられないわ！

「お礼はいるよね？」

チュッ

ええー!?自分でもびっくり!ど、どうしようなんかして恥ずかしさをごまかさないと・・・

「べ、別にあんたのこと好きなわけじゃないんだからねっ!」

言っちゃった!うう・・・どうやっても素直になれないよ・・・

「また会いましょう!」

あたしはそのまま帰った。

○

「あ・・・え・・・?」

私は未だに声がでなかった・・・。

「い、今・・・。」

学舎さんも同じらしい。だって今、双芽君にちゅ、ちゅーしてたよ!頬にだけど・・・。

「も、もう双芽君なんて嫌い!!」

「社長が・・・キス?」

学舎さんのシヨックはすごく大きかったらしく、動きさえしなかった。

○

「ただいまー」

はっ！双芽君が帰ってきたよ！学舎さんは普通にしてるかな？……
つて、コーヒーこぼしてる！お、落ち着いて！！

「百香、ゲームでもするか？」

「嫌」

ああ！思わず冷たく言っちゃった！ど、どうしよう。その後も何か
双芽君に言われたけど断っちゃった！もう引き返せないよ！

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

私の方がききたいよ……。そうだ！ちょっと恥ずかしいけど……
。。。

「横向いて」

よし、これで準備おーけー。なんでか双芽君が震えてる。寒いのか
な？

「えいつー！」

とうとうキスしちゃった。こんな恥ずかしいものだったなんて……
……。まあ、でもこれであの子たちと対等だよな。

「さあ、ゲームやろう！双芽君！！」

私は恥ずかしさをごまかすようにゲームをやり続けた。

○

まさか……。社長がキスするだなんて驚きました。そして我に
帰った時、なんと江戸城さんともキスをしていた。まったくあそこ
までされないと分からないなんて……。

「鈍感ですね。」

私はそのままゲームを始めた2人を楽しげにコーヒーを飲みながら
眺めていた。

○

僕は百香とのゲームを終え、帰宅した。僕の部屋はなんてことない
机や本棚、ベッドなど生活にかかせないものが置いてあるだけの普
通の部屋だ。

「今日はどういう日なのだろう……。」

ベッドに座りながら僕は考えた。3人の女性にキスされた出来事これは……

「今日がキスの日だからに違いない！」

まあ、違う確率の方が高いがそう思わないと寝られない。

「ま、まさか……3人とも……僕のことを……なーんてね。漫画の主人公じゃあるまいし」

僕はそのまま寝てしまった。次の日は普通の日だった。百香がなぜか目をあわせてくれなかったが。もしかしてまだ怒ってんのかな？

第7話特別編〜ミンナノキモチ〜（後書き）

今回はいろいろな人の目線から書きました。

ちょっと読みづらかったかもしれませんが、これはこれでね。

次はまた新しい事件です。

第8話問題編〜シヨウジヨノオモイ〜

「あー、暇だー……………」

僕、新野双芽しんのふためはとてつもなく今がだるい…………。まあ、理由なんてないんだけど、強いて言うなら気温が高くなっていくことかな。夏なんて大嫌いだ…………。まだ5月だけだ。

「もうだれてないで仕事してよ」

江戸城百香えとじろももか、クラスメイトだ。

「仕事がないからだれてるんだろっが！」

今は事務所の中。日当たりがよすぎてイライラしてくる。暑い…………。

「社長がそんなんだから……………」

「何か言っつて！これじゃ僕は何が悪いのか分からないまま改善できないよ！」

僕のことを社長と呼ぶのは学舎真琴まなびやまこと。秘書的役割のつて…………。エピソード見ようぜ…………。それで分かるはずだ。

「あー、なんかさ…………こう…………ドーン！つとした仕事こないかなー」

「すみません！行方不明になった人を探してほしいんですけど！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

本当にくるとは・・・・・・・・僕の言葉には特殊な力が宿っているんだろっかと思うほどタイミングがよかった。失礼だけど警察の方に行っってはどうでしょうかと言いたい内容だった。

○

「失礼ですけど、警察の方に行っってはどうでしょうか？」

言っていた。自分でも驚きだ。さっきまでは暇、暇と騒いでいたものだけれど、急にやりたいことがでてくる。ていうかぶっちゃけそんな重い内容で気が動転気味。

「いえ、行っただんですが全然話を聞いてくれなくて・・・」

なぜだろうか・・・・・・・・警察が何もしてくれないだなんて・・・・・・・・今思ったがこの人は行方不明になった人のお母さん・・・・・・・・ではないよな。お姉さん・・・・・・・・としても若すぎるような気がする。僕達より若く見えるのは気のせいだろうか。

「ちなみにあなたはその行方不明になった人のお姉さん？」

「いえ、私は他人です。一昨日初めて会う予定でした」

は？ってことは親族でもなんでもない人・・・・・・・・警察に頼んでも何もしてくれないわけだ。子供の妄言かと思ったのだろう。

「で、君は何歳？」

「そんなに驚くことでもなかったな。でも一昨日こないぐらいでまだ行方不明になったと決まったわけじゃ……」
「いえ、行方不明です。彼は一昨日メールで送ってきたんです。行方不明になると……」

「どうしよう……自己申告ほど信じられないものはないと教えたほうがいいたろうか……。行方不明になるやつがメールを送ってくるわけがないと。」

「なるほどねー、うん、わかった。探してみるよ」

「ほんとですか!？」

「うん、任せなさい」

百香と真琴がどうするんだこの野郎という目で見てくる。僕もわからないや。でもこの少女はいくらなんでも可愛そうだと思った。そうこの彼女は行方不明になったと信じたいのだ。それじゃなきゃ、彼は彼女に会いたくないということになる。

そう、自らが行方不明になると嘘をついてまで会いたくないと。

「じゃあ、今日は帰っていいよ」

「うん、ありがとう」

そう言っただけで彼女は帰って行った。

「いいのですか、社長」

「ああ、大丈夫だよ。ちゃんと特徴とかも聞いたし」

「そうではなくて……」

「分かっている。探さないといけないんだよな。ちゃんと」

このままじゃいけないんだよ。そう自分に言い聞かせてさっそく捜査の方を始めた。

「で、どこのサイトで出会ったの？」

「まって、今読むから。えーと、なにになに……SNS サイト『フリーダム』？」

……あれ？聞いたことがあるような名前だな。

「社長これ、社長も登録してるサイトじゃないですか!！」

「あ……」

べ、別に忘れてたわけじゃないんだからねっ！勘違いしないでよねっ！

第8話問題編〜シヨウジヨノオモイ〜（後書き）

大分遅くなりましたが。

まだ問題編なのでなんとも言えませんね。

元主人公、今は脇役願望の方もよろしくお願いします！

でわ。

第9話解決編〜シヨウジヨノオモイトソレカラ〜

「げっ……………」

俺、新野双芽しんのふためは『フリーダム』というSNSサイトを見ていた。なぜなら少女の名前を探していたのだ。さっき相談してきた少女の名前を。

「北見駒野。確かその名前だったよな」

少女の名前は北見駒野。ハンドルネームは『コマ』。見つけたよ。SNSコミュニティ、『元気だそう会』に。よりによってあの意味わからない会かよ。

「へー、この元気だそう会の管理人ってフリーダムの管理人でもあるのか」

ん？たしか管理人は…………。そう思い、僕はそのコミュニティに参加。そしてオフ会に出ることになった。

○

「あなたが管理人ですか？」

「そうです。管理人の『ナイス』です」

「僕は『フタバ』です。よろしく」

そんな感じで挨拶。そして……

「あなたが犯人でしょ」

「何がでしょう?」

「『コマ』さんと仲良くしてた人を殺したんだろ?」

「何を言っているのでしょうか?」

「『バツ』。本名は名無雅彦。ここらへんにすんでる人ですよね?」

「……!」

「彼女はメールがきたと言った。彼から行方不明になると。でもそれはメールではなく、コミュニティのメッセージなんじゃないかと」

そう言っつて僕は携帯を見せる。

「彼女から携帯を借りました。確かにメッセージです」

「それとなんの関係が……」

「メッセージを送れるのは管理人のみでしょう?」

「!!--」

すると管理人は……全速力で駆けだした。

「あ!てめえこらまで!」

しかしそれは警察署に駆け出したただけだった……。

○

「そう……ですか……」

彼女は残念そうに肩を落とした。それはそうだろう恋人が死んだの

だから。

「でも大丈夫です！私は元気ですから！だから……」

百香は抱き締めていた。彼女を。

「こういつ時ぐらないでいいのよ……」

「うっ……ひっく……」

これでよかったのだろうか。いやよかったのだろう。僕は解決したし、真実も分かった。ただそれでいい。そんな感じで僕の日常は進んでいく。

第9話解決編〜シヨウジヨノオモイトソレカラ〜（後書き）

荒い最終回です。これは短編でこれから出していこうと思います、一旦
完結です。次から新しいSFチックな物語を始めようと思います。

でわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2293/>

推測屋～できそこないの日常推理～

2011年1月4日18時52分発行